

『亀の恩返し』 作…岩本憲嗣

■あらすじ

幕末・海辺のとある小藩。

ある晩、爆音と共に巨大な釜が海へと落ちる。

それに乗っていたのは木村和。そして彼女を救ったのは池岡定継。

自分勝手な和とその言動の全てが刺激的な定継。

共同生活を始める二人だが、やがて終わりがやって来る。

和の【通信機】が直り巨大な【タイムマシーン】という釜が再び姿を現す。

藩から不遇を受ける定継と一緒に来るよう誘う和。だが彼は断る。

そう、定継は和という中である決断を下していたのだ。

■登場人物

木村和（きむらのどか・女・29歳・研究員）

池岡定継（いけおかさだつぐ・男・海辺の小藩の藩士）

SE…非常事態を報せるアラート音。あちこちで機械のショートする音。

和「もう！これだから新型のテストは嫌だったの！動け！動けって……ええええ！！」

SE…爆発の後、大きな物体が海に落ちる音。

SE…囲炉裏の火の音

和「……火？ひよっとして燃えて！？」

定継「目覚められましたか」

和「え？誰よアンタ……」

定継「驚かれましたか。拙者は池岡定継。一応はそれなりの家柄の武家にござれば、決してその、後ろめたき……」

和「うわっ？服は？何この着物？」

定継「で、ですから！ずぶ濡れでした故、拙者の。ご、ご心配召されるな。出来得る限り、

お姿は見ぬように……」

和「待つて待つて……ずぶ濡れ？私が？」

定継「いかにも、浜辺に打ち上げられておられたのを拙者が見つけ、ここまで……」

和「タイムマシンは？デカくて丸くて……」

定継「お釜のような？ならば沖へ流され……」

和「ウン……そんな。私どうやって帰れば」

定継「時に……エグレス人でありましたか？」

和「え？誰？……私？ないない、この顔だよ。木村和だよ。バリバリに日本人でしょ」

定継「しかし今エグレス語を話された。タイムなんとかと」

和「ああそれは……まあ説明しても分からないから」

定継「そう仰らず御教示願いたい。エグレスでなくとも結構。この通り！！」

和「は？は？……はあ〜」

SE…鍋のぐつぐつと煮える音

定継「……ふう。さあ如何でしょう」

和「見せて……完璧。流石は学者」

定継「そのような大層なものでは……さあ、そろそろ夕餉に致しましょう」

和「OK……って、今夜も雑草？」

定継「雑草に非ず。鍋です。尤も数日雨が降っていない故、昨晚より見劣りは……」

和「なら買ってきてよ。良家の武士でしょ？」

定継「わけあって市中には出らませぬ」

和「何で？引き籠りってこと？」

定継「藩勢が代わり申した。今の殿は徹底した攘夷のお考え。拙者のように異国の学問に傾倒している者は問答無用にてその命すら……」

和「で、逃げてこんな山奥で草食ってる？」

定継「恥ずかしながら……されど、だからこそ和殿にお逢い出来た。機械工学と申されたか？かように面白き学問にも触れることが出来た」

和「でも通信機直ったら私帰るから」

定継「……それは仕方なきこと。それまで拙者は……」

和「その後どうするの？その殿つてのがポックリいくまで草食って過ごすの？」

定継「和殿はいつとて難しき事を申される」

和「でもそれを案外こなしちゃうよね。筋いいよ定継は……さ、もう一仕事だ」

定継「しょ、承知した」

SE…暫くの沈黙の後、通信機の発する

電子音が徐々に鳴り響いてくる。

定継「不可思議な音だ。この音と和殿が帰るのと何の関係が……」

SE…タイムマシンの出現する音

定継「この光?…なんと、あの時の釜?」

和「ブー。タイムマシーン。私はあれで五百年後に帰ります」

定継「五百年後?め…和殿!?!」

SE…遠くから鳴り響く呼子笛の音。

和「そりゃ、これだけ目立てば見つかるよね、ごめんね。また引っ越さない」と

SE…タイムマシンの着陸音。続いて自動でドアの開く音。

定継「扉が独りでに?」

和「これで驚くんだ。んじゃま」

定継「和殿!?!…ご達者で!?!」

和「…は?話聞いてた?引っ越さない」と

定継「…と、申されますと」

和「草食べながら燻らしておくの勿体ない。一緒に来る。ほら、一応は…私の命の恩人だし?せめてもの恩返し」

SE…近づく呼子笛と藩士たちの喧騒。

和「チンタラしない!亀かつーの!」

定継「…ははは、亀は和殿でござろう。助けた拙者に素晴らしき時をくれた」

和「じゃあ定継は浦島?あ、怖い?大丈夫、別に五百年後に行っても爺さんには…」

定継「拙者の憂いは我が藩。玉手箱を開けたが如く、何の爽りもなくただ老いてしまう…今のままでは。なればこそ、拙者は我が藩に残りたい」

和「…は?」

定継「和殿と字び分かったのです。このような学問。拙者はこの藩から興したいと。拙者のように燻る者を増やしてはならぬと」

和「いや、でも」

定継「独りでに開いたその扉に入るは容易きこと。されど、拙者は己が手で扉を…」

和「ったく!?!…何で学者ってのはどの時代でも頑固なんだか。定継…達者で」

SE…タイムマシンの起動音。凄い勢いで飛び去る音。

定継「ゲホゲホッ。砂埃で前が全然……そうか今ならば。和殿……玉手箱、確かに受け取り申した。ゲホゲホッ……ははははは」

【終】

※ご利用上の注意※

- ・本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメール一報頂けますようお願い致します。
- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まつての練習でのご利用。
- ・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。
- ※連絡が必要となる場合
 - ・ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。

・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)